

知的障害者の情報機器の利用に関する社会的課題 —軽度及び中度の当事者への聞き取り調査から—

打浪文子

(2014年10月15日受理)

要旨

本稿では、軽度から中度の知的障害者16名に対して、通信機能を持つ情報機器(PC及び携帯電話)の利用状況及びその具体的様相を把握し課題を析出するために、半構造化面接法による聞き取り調査を実施した。調査結果から、知的障害者のPC利用は自由に利用できる少数と利用環境の整わない多数に二分されることを明らかにした。また携帯電話は対象者全員に利用経験があり、情報伝達や支援代替的なツールとして活用されていること、通話以外の固有機能も幅広く利用されていることを明らかにした。

健常者社会との情報格差を減らし彼らの社会参加を促進するために、技能習得の機会の拡大、知的障害者が「利用しやすい」ことに着目した情報機器の活用方法の検討、公的な知的障害者向けの情報支援施策の展開、当事者・家族・支援者への意識啓発が今後の社会的課題である。

キーワード 知的障害、情報機器、デジタル・デバインド、PC、携帯電話

1 はじめに

情報通信機器(以下、情報機器と称す)の開発及び飛躍的なネットワークの広がりと同時に、障害を持つゆえに情報・通信から疎外されてしまう人々の情報格差(デジタル・デバインド)が懸念されている¹⁾。しかし、さまざまな情報機器の開発や情報・コミュニケーションの保障について研究や実践が進められる中、知的障害者は複合的な情報格差に取り残されている^{2, 3)}。

知的障害者は情報伝達の媒体である情報機器そのものの操作に困難を伴う場合が多いゆえに⁴⁾、最も情報格差が大きい一群となる。実際、近年の総務省による調査では、知的障害者のパーソナルコンピュータ(以下、PCと称す)利用率は28.3%、インターネット利用率は46.9%となっており、一般的な普及率及びその他の障害種と比べて極めて低い結果を示した⁵⁾。しかし、同省の2003年の調査結果では知的障害者のPC利用率は26.2%、インターネ

ット利用率は19.6%であったことから⁶⁾、知的障害者のPC利用及び情報機器を利用した情報アクセスは少ないながらも増加傾向にあるといえる。さらに文部科学省の『教育の情報化に関する手引』で、知的障害を持つ児童生徒に対する情報教育の意義と支援のあり方のひとつとして職業教育の充実が掲げられたように⁷⁾、特別支援学校の教科としての「情報」の学習や、就労に関する教科学習の中での情報機器の技能取得の機会の増加が見られる⁸⁾。加えて、知的障害者の「新たな職域」としてPC技能を活用した就労の推進が着目されており⁹⁾、就労先でPCを用いた事務作業に従事する事例も増加している。

さらに、この十数年で身近となった情報機器として、携帯電話の利用の拡大がある。総務省の近年の調査では知的障害者の携帯電話・PHSの利用率は56.7%に達している¹⁰⁾。また特別支援学校高等部でも所持率の上昇が見られる^{11)、12)}。新たな端末の開発と普及により、今後より一層利用が広まることが推測される。

このように、知的障害者が情報機器を利用して情報を受発信するための環境整備は、社会的にも早急な対応が求められる課題である。しかし先行研究のほとんどは量的な実態調査であり、かつ当事者が答えることを前提としつつも代筆を認めているため、当事者の意見は直接的には反映されにくい。また、それらの先行研究は情報機器の操作に伴う利用状況や不便さについて当事者視点から詳細には踏み込んではいない。「個々人の特別なニーズは医療的診断のみで決まるものではなく、その人の社会的文化的文脈も考慮して初めて明確になるという認識が、情報アクセシビリティを考える際に極めて重要である」¹³⁾ように、個人の生活史・環境に根ざした当事者の視点からの現状と課題の把握が必要である。そこで本稿では、今後の情報化社会においてさらに接点が増えると予想される通信機能を持つ情報機器であるPC及び携帯電話の利用状況及び接する際の困難の様相について、聞きとり調査を実施し、当事者の視点から知的障害者の情報機器の利用における課題を析出する。今後の情報化社会で彼らが情報弱者として取り残されることがないように、情報アクセスにおいて社会が配慮あるいは実践すべき課題を考察することを本稿の目的とする。

2 方法

20歳以上の軽度または中度の知的障害者に対して、平成22年6月から10月にかけて半構造化面接法による聞き取り調査（以下、本調査）を実施した^{14)、15)}。なお、調査対象者は社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会（以下、（福）全日本手をつなぐ育成会）¹⁶⁾に紹介を依頼し、関東・関西の5都市の各支部から紹介を受けた。（福）全日本手をつなぐ育成会に調査対象者の紹介を依頼したのは、育成会から派生した当事者組織による活動である「本人活動」¹⁷⁾に着目したためである。当事者としての主体的な意識を持ち、積極的に発言する機会の多い本人活動との接点を持つ知的障害者が、障害ゆえの社会との摩擦を言語化することに適していると考えられたからである。

調査は関東・関西近郊で、対象者になじみのある集会所や公民館、福祉施設の会議室等で実施した。面接時間は各1、2時間程度であった。調査内容は1）年齢・性別・障害等級・

家族構成・就労状況の確認（フェイスシートの記入）、2）就労時・日常生活時・余暇時¹⁸⁾における情報機器の利用機会とその際の具体的な困難についてであった¹⁹⁾。ICレコーダーに記録した音声データから逐語録を作成し分析の対象とした。分析手順及び方法は佐藤（2008）を参照し²⁰⁾、PC・携帯電話の利用の促進要因及び阻害要因の解明を目的としたコーディングを行った。

3 結果

対象者16名²¹⁾の個々の年齢・性別・障害等級・就労状況を表1として、対象者の情報機器との接点と利用状況の詳細を表2として文末に示した。表2に基づき情報機器の利用状況を分類した項目を表3として文末に示した。

3-1 対象者の属性（年齢・性別・障害等級・生活形態・就労状況）

対象者16名の平均年齢は40.1歳、男性9名、女性7名であった。30代が6名と最多であり、20代が3名、40代が3名、50代が2名、60代が2名であった。障害程度は療育手帳²²⁾の区分に拠り確認したところ、軽度に該当するものが9名²³⁾、中度に該当するものが7名であった。16名のうち家族（親・きょうだい）と同居が11名、独居が4名、グループホームでの生活者が1名であった。なお、独居またはグループホームでの生活者の合計5名は全員が軽度知的障害者であった。就労状況は、全体の半数の8名が一般就労であり、健常者中心の職場に勤めていた。

3-2 就労時・日常生活時・余暇時におけるPCの利用

PCの利用経験は16名中13名に上るものの、PCを自宅にて自由に直接利用できる状況にあったのは16名中5名、過去に毎日利用できる状況にあった者も含めれば6名であった。また日中就労している対象者が16名中15名であったが、業務にPCを利用していたのは1名のみであった（表2：PC利用状況の欄参照）。

3-2-1 直接的な利用

（1）就労時の使用からの利用

Eさんは、調査対象者のうち唯一仕事においてPCを利用していた。7年前に就労した調査当時の職場で、ワード及びエクセルを用いた業務連絡や日誌の記入、勤務表の確認などをPCで行ったのがきっかけであった。PCを使ったのは仕事が初めてであり、就労当初は操作が困難であったが、「入社して教えてもらった。最初は（日誌が）手書きだったけど『大変なのでPCで書いてみて』と言われて教えてもらった」と職員からやり方を習い、徐々に慣れた。また「(PCのことで)相談できるようにしてくれている人(職員)は三人いる」と、即時的に援助を得られる状況にあった。

また「自分でもPCをいじるようになったのはそのころから」と、入社後の業務をきっか

けに自宅でもPCを購入し日常生活でも利用するようになった。独居のEさんは支援者と相談し、貯金を1年以上積み立てPCを購入した。特によく利用するのはインターネットであり、好きなアイドルの情報を掲載したブログやウェブサイトは欠かさず確認していた。また遠方のコンサートなどに出向く際、「旅行の予約、手配は全部PCでやってる。電車の路線・時間とかも」「調べ物が調べやすい。前は旅行会社に行ったら高くついてたけど、今は（インターネット予約で）安く行ける」と自分の趣味から発展的にインターネットを活用していた。またPCだけでなく「iPadやiPodを欲しいと思っている。年配の人も使ってるし使いやすそう。新しいものには興味ある」と、新しい情報機器への積極的な興味も示した。

(2) 学校での技能習得からの利用

大学在学時に療育手帳を取得したAさんは「レポートや調べ物にPCを使っていた（中略）大学では使わないといけなことが多かった」ので、その期間に「自分で市のPCの講座に2年間通った」と自ら情報機器を利用するためのさらなる技能を身に付けた。「小学校からPCを使っている。中学・高校・大学と情報関係の授業もあった。（中略）PCは家族も使うけど、家でも自分が一番詳しい」という状況にあった。

また、Bさんは中学校の授業でPCを使ったのをきっかけに、PCをよく利用するようになった。余暇の時間はインターネットで動画を見る、PCを使って絵を描くなどの利用をしていた。同じく授業や中学校の部活動でPCを使っていたCさんは「(PCの使い方を) 家族に教えることもある」と親世代よりもPCの利用に習熟していた。

(3) PC教室の受講からの利用

Gさんは数年前に家の近くのPC教室に通った経験があり、その後自分でもPCを購入した。文書作成や趣味（料理やお菓子づくりのレシピ）の検索などのインターネットの利用や、年賀状作成にPCを利用していた。入力は「時間はかかるけど、ローマ字で」行っていた。今後は「iPadなどを使ってみたい。使い方がちょっとわからないけど、やってみたいと思う」と新しい情報機器への興味を示した。

またKさんは、情報機器や家電製品などを扱うのが趣味のひとつであった。家電製品が好きで休日は家電量販店に行くことが多く、自宅に自分で購入したノートPCを2台所有していた。PCの利用方法は知的障害関連団体の支援者に頼んで定期的に教えてもらった上、地域のPC教室に半年通った経験があった。またKさんは鉄道関係が好きで単独で旅行することも多く、今では自らブログを作成・更新し、旅行先にてデジタルカメラで撮影した写真をブログに掲載していた。またインターネットは「旅行などに出かける時のルートや、料金を調べたりなどに役立っている」と語り、自分自身で鉄道を利用する旅行計画を立てることに利用していた。「新しいPC、欲しいのが2台ある」「iPod touchも好き。今度買おうと思っている」と新しい情報機器へのさらなる興味も示した。

3-2-2 援助を受けての利用

(1) 家族の援助を受けての利用

Dさんは本人活動に積極的に取り組んでいた。障害を持つ仲間の話し合いのまとめ役で議題を文書にして配る機会が多いDさんは、週に2、3回程度PCで文書を作成する必要があったが、その際「(みんなに配る)原稿を手で書いて、それを兄にPCで打ってもらう」ことで間接的にPCを利用していた。それに関して、「自分でPCを使うことはない。(中略)でもPCが(文章を)読み上げてくれたら自分でもぜひ使いたいし、文章も作りたい。兄に打ってもらっているので、できれば全部自分で使いたい」という希望を持っていた。

特例子会社で働くJさんもまた、本人活動に積極的に参加していた。本人活動中のサークルの取りまとめをしており、行事や予定などを配布するために月1、2回程度原稿をPCで打つ必要があった。しかし「キーボードに慣れない。アイウエオ順だったらいいのに。(中略)本当はいっぱい打ったりしたいけど、すぐ難しくてあきらめてしまう」ゆえに、PCを利用するときは「母親に見てもらえるか、側にいてもらうことが多い。妹は詳しいけどあまり教えてくれない」と援助を得て利用していた。

(2) 支援者の援助を受けての利用

Pさんは、「PCは作業所で少し習って使っている。自宅にもあるけど、姉が触らせてくれない」と、家庭では利用できない状況にあったが、作業所で利用及び練習を行っていた。またPさんは休日に友人と出かけることが多く、作業所での休憩時間などを利用して、支援者と一緒に外出先の飲食店などをインターネットで検索していた。「文字を入力するのが難しく、職員さんにしてもらってる。これからもっと練習したい」と語った。

3-2-3 現在の利用なし

(1) 過去に利用経験があるが現在は利用なし

Iさんは就労訓練の際にPCを利用した経験はあったが、自宅にきょうだいがあるものがあるものの使わせてもらったことはなかった。「IT講習を2度受けたことがある。ゲームとか、クリックの仕方とか。あまりインターネットとかまでやらなかった。(中略)結局PCで何ができるのかよく分からない。(中略)最近はいろんなところでPCや触って操作するの(タッチパネル操作の情報機器)が増えた。できれば使えるようになりたい」と考えていた。

Fさん、Nさんは、作業所内や知的障害者関連団体でのPC講座で1、2度触ったことがあるものの、所持には至らずその後も利用していなかった。PC講座を1回受講したFさんは、自宅に所持がなかった。使ってみたい気持ちはあるが、「PCは高いから値段に見合うくらい使えるかわからないので(買わない)」と語った。

また、Hさんは高校の時にPCを利用して文集を作った経験があったが、以来使っていなかった。身近な人がPCを使うのを見て興味はあったが、「一人暮らしをしていて、部屋も狭くて置き場もないし、高いし、迷惑メールやウィルスも心配だし」という理由で所持や利用はなかった。

(2) ワープロの利用経験はあるが現在の利用なし

日記を書くことが趣味のMさんは、「ワープロは昔（施設にいた時）やっていたから、文章書きたいのでPCやってみたくて思ってる。文章書いたり、打ったりするのが好き。年賀状や手紙もいろいろ（ワープロで）書いてた。（中略）日記をPCで打ってみたい。他には写真を取り込んで、日記のところにつけてやってみたくて」と語った。

(3) 全く利用経験なし

Lさんは数年前にはPCを買って利用することに興味があった。しかし、「話を聞くと、あると便利そうだけど。PC自体の知識と能力があればいいんですけど。（中略）『教室に通えば？』といわれるが、それにかかるお金はいくらだろうとか、ウイルスでダメになったらどうするんだろうとか」と、利用へのためらいや不安があった。また、「便利だよと言われるけど、どういうPCを買ったらいいのかもわからない。若いときは欲しかったが、PCもどんどん新しくなって、きりがなくなってしまいそう」と感じたLさんは、今では「さわらぬ神にたたりなし、ということで。むしろ、自分で触るよりも（支援者に）全部お任せにしてしまいたい」と、気持ちに変化していた。

また、一人暮らしのOさんもPCを所持しておらず、これまで全く触る機会がなかった。当事者同士の交流が多いOさんだが、連絡は家の電話のみであり、「インターネットとかメールの必要を感じない」と所持や利用の必要性自体を感じていなかった。

3—3 就労時・日常生活時・余暇時における携帯電話の利用

携帯電話については、16名中13名が調査時に所持しており、また現在所持していないものの過去に利用経験があった3名とあわせると、全員に利用経験があった。また、携帯電話を業務上利用するのは4名であり、業務上の用途は電話による連絡（呼び出し、伝達）のみであった。（表2：携帯電話利用状況参照）

3—3—1 直接的な利用

(1) 通話に関する利用

日常生活では対象者全員に通話の利用経験があった。例えばDさんは「前はいちいち（電話番号を）紙に書いて、それを見て（公衆電話から）かけていたけど、携帯には必要な人が登録してあるから、すぐ連絡できる」「父親が倒れた時に、すぐ救急車が呼べて、すぐ連絡できてよかった」と即時的に通話ができることへの便利さを感じていた。また、独居のMさんは「早朝、（強盗に）お金とられそうになって、あの時（支援者と警察に）電話した。ちゃんと使えたなあ。しばらく腰ぬけたけど、そういう時ちゃんと対処できた」と日常生活に携帯電話が役立つ経験を振り返ったが、それゆえに「携帯電話が手放せない」「持って歩かないと不安」でもあった。

一方で、日常的に利用している反面、知らない番号から電話がかかってくることへの不安が複数の対象者から言及された。さらに例えばMさんのように、「一人暮らしになると寂

しかったから『家に来て』っているんな人に番号を教えたら、『お金貸して』ってかかってきた。そういうのはすごく不安。何か（個人情報）書くときも慎重に書く。教えていいのかどうか」と、通話を日常的に利用することにより自身での判断が難しい場面が生じていた。

(2) 文字によるコミュニケーションに関する利用

携帯電話を調査時に利用していた13名のうち10名がメールを利用していたが、そのうち7名は通話よりもメールでの利用が主であった。例えばGさんは毎日友人とのメールを利用しており、「仕事で何か嫌なことがあったら、それをメールで打って。こういうことがあったとか、話しやすい人にはちょっと言いたいことを気軽に言えるようになった」と、利用を肯定的にとらえていた。またIさんも友人とメールする機会が多く、「メールする友だちは多い。メールで相談を受けたりもする。（中略）挨拶がてら、おはようとかおやすみとか。メールを使わない日はない」と利用が頻繁であった。

さらにDさんもメールを主として利用していたが、「メールでも、絵文字を使うとわかりやすくなる。返信するとき、OKと書いて、○（人が手で丸を作っている絵文字）を入れる」と自らに適した工夫を行っていた。

(3) インターネット及びPCの代替利用

インターネットを携帯電話から利用している、またはしていた対象者は半数の8名に上り、その大半が時刻検索やニュース・天気予報を見るためであった。その中でも特に、中学生の頃から携帯電話を利用していたBさん、Cさんは、携帯電話からインターネットを頻繁に利用していた。Bさんは、自宅のPCが壊れたのをきっかけに携帯電話が最もよく利用する情報機器となっていた。またCさんは、主としてメールとインターネットを「もうPCいらないくらい」に日々利用しており、通話やコミュニケーションツールだけでなくPCに準ずる形で利用が行われていた。

(4) 手書き・メモの代替利用

Hさんはアルバイトで書類や原稿を書くことがあったが、その際「前は手で書いていたけど、今はメール（で原稿を書くこと）が多いかな」と語った。また外出の際には「スケジュール機能は使いまくり。食事をした後、買い物をメモしたりも全部スケジュールでできるから」と、日々のメモとして携帯電話を利用していた。

また、文章を作成することが苦手なPさんは、「カレンダーに予約を入れたりする」とメモを書く代わりに予定などを打ち込んで持ち歩いていた。Fさん、Hさんも同様の利用があった。

(5) 固有機能の利用

対象者はカメラ機能を利用するだけでなく、4名が「QRコード」を利用していると答えた。Eさんは「クーポンとかを使うために」、Gさんは「ポスターやチラシの隅に載っていたら

たみに使う」ことがあった。一方で利用のない12名は機能を理解しておらず、例えばHさんは「QRコードがよくわからない。簡単なら使ってみたい」と語った。また、携帯電話に付随している「電卓」や「アラーム」などの固有の機能が使われていたが、電製品に詳しくPCも使いこなしていたKさんは対象者の中で唯一「携帯でワンセグ (TV) を見る」こともあった。

3-3-2 間接的な利用

(1) 家族の援助を受けての利用

Dさんは仕事でも余暇でも外出が多く、確認のために家族から行程やルートを記したメールをもらうことが多かった。「携帯のメールでも、やじるしとか入っていると見やすい。いつも兄に(出かけるとき)ルートを教えてもらう時にそうしてもらう。自分から他の人に(教えてもらう時は)こうしてほしい、とお願いしている」と携帯電話を通して支援を受けていた。また、「知らないところに行くときは、事前に全部調べておいて、携帯にルート・時間を(メールで)送ってもらっておく」と、家族を通じてインターネットを間接的に利用した上で携帯電話をメモとして役立てていた。

また、Pさんは「携帯のメールとかも、自分からあえてやろうと思わない」と語ったが、単独での外出が多いので、外出の際には自らまたは家族の援助を受けて作成したルートなどのメモを持ち歩いていた。「携帯電話に予定をメモしたりする。文字を(手で)書くのはあまり好きじゃないから、これ(携帯電話)に書いていくことが多い」と手で書くことの難しさを携帯電話の入力でカバーしていた。

(2) 支援者の援助を受けての利用

携帯電話のメール利用において共通して聞かれたのは、迷惑メールへの不安と、メールアドレスの入力における困難であった。中でもIさんは、「よくアドレスが変わる人がいて、そのたびに書かないとわからないことがある」、とアドレスを書き出して確認していた。また、Lさんは通話とインターネットが主でメールはほとんど利用していなかったが、その理由は「メールのアドレスが長くてよく分からない。メールをあまり使わないのは、わからないことが多いから」であった。こうした困難について、一人暮らしのHさんは「ヘルパーさんに手伝ってもらうのは、連絡先のアドレスの入力や登録。文字ひとつ違うだけで相手に送れないとかあるので、それはやってもらわないと困る」と、アドレス入力において支援者から援助を得ていた。

また、インターネットを利用していた8名のうち2名は、インターネットのサイトの利用に関するトラブルの経験があった。独居のMさんは携帯電話を利用する際に、「前はややこしいのをいっぱい入れてお金がかかっていた。自分では気づかないうちにそうになっていた。これもいれよう、これも入れようと思ったら、全部お金が必要だった。あとで(支援者に)とても怒られた」と携帯電話のインターネット利用に際し数度のトラブルを経験し、支援者から解決のための援助を得ていた。また独居のOさんも携帯電話からのインターネットによる課金トラブルや出会い系サイトの利用によるトラブルを過去に経験していたが、これらの

トラブル解決の際に支援者の援助を得ていた。

3-3-3 現在の利用なし

(1) 通話料の問題による利用中断

Jさんは以前PHSを利用していたが、「通信料が高く半年くらいでやめてしまった」と語った。現在は外出時に電話を掛ける際は公衆電話を利用していたが、「公衆電話がもっと少なくなったら、また(携帯電話を)買おうかな」と考えていた。

(2) 利用の煩わしさからの利用中断

グループホームで生活しているNさんは、「お金もかかるし、今は使いたいと思わない。もし使うとしても月額いくらか決めて使いたい。以前電話番号を教えたらじゃんじゃんかかってきたこともあったし」と金銭的理由に加えて、かつての利用の際に感じた煩わしさが理由で所持していなかった。

また、Oさんは以前携帯電話を所持していたが、携帯電話からのゲームの利用や出会い掲載とでのトラブルを経験していた。「面倒くさいのとお金がかかるので」という理由で所持をやめてしまったOさんは、現状について「自分は携帯など持たなくたって、家の電話で十分。持っていたときに便利だと感じたこともなかった。あまり持ち歩いたりもしなかった。むしろ面倒だった。(中略)でも、『また持ったらいいんじゃないの?』と実家に言われているので、そろそろ持つかもしれない。家に電話とFAXがあるけど、今度持つときは逆に携帯だけにするかも」と今後を考えていた。

4 考察 —— 知的障害者の情報機器の利用に向けた社会的課題

本調査では、軽度及び中度の知的障害者の情報機器との接点の具体的様相を明らかにした。PCは、自由に利用できる状況にある6名とさまざまな要因によって利用が阻害されている10名に二分された。一方、携帯電話は全員に利用経験があり、また通話だけでなく用途に合わせ幅広く利用されていた。以下では、今後の情報化社会における知的障害者の情報アクセスの保障のために配慮及び実践すべき課題について考察する。

4-1 直接的な利用における課題

PCを自ら自由に利用できる環境にあり、かつ自ら直接利用できる状況にあった6名は全員が軽度知的障害者であった。この6名のうち独居の1名は、職場が利用のきっかけとなり日常的にも利用するようになっていた。家族と同居していた5名は、PCの利用に関しては「家族」からの利用に関する支援は受けておらず、時に「家族に教えることもある」という状況にあった。彼らに共通する利用の促進要因は、職場や学校、PC教室など、同居家族とは関係ない場面で自ら情報機器の操作を身につける機会を得ていた点である。彼らは自宅などでも趣味をはじめとする様々な用途に利用しており、また新たな情報機器への興味も示してお

り、一層の情報機器の利用への意欲があるといえる。

また、携帯電話は通話だけでなく、メールやインターネット、メモ・スケジュールなど、用途に合わせ幅広く利用されていた。それだけでなく、近くに支援者がいなくても遠方からの連絡によって窮地をまぬがれた例があったように、携帯電話はさまざまな状況において知的障害者の日常生活に浸透し、彼らを間接的に助けていた。また、絵文字の利用によって情報伝達を補完した対象者や、携帯電話をメモとして活用することによって手書き文字への苦手意識をカバーした対象者もいたことから、軽度や中度の知的障害者にとっては、必要な時に必要な人的支援が得られないことを携帯電話の活用によって補うことが可能であった。過去に全員利用経験があり、かつ今後も持とうと考えていることから、軽度・中度の知的障害者にとって携帯電話は極めて身近かつ有用なものになりつつあるといえる。

PC・携帯電話を用いたインターネット利用は本調査では20代から40代の層が中心であったことから、今後は若年層を中心とした利用の拡大が見込まれる。ただし先行研究の調査では、視覚障害等の障害種ではインターネット利用は「知りたいことを調べるため」が最も高いのに対し、知的障害では「趣味に関するホームページを見るため」が最も高い²⁴⁾。本調査の対象者も個々の趣味に関する情報収集が多く、利用内容は多岐にわたっているものの、きっかけは「趣味」に関する情報収集が原動力となっていた。PCから旅行の予約などの発展的な利用をしていたEさん、Kさんも動機は趣味からであった。よって今後は、より生活に役立つ情報の受発信など、知的障害者のエンパワメントの一手段として情報機器の活用を支援することが重要となろう。知的障害者の日常生活に活用できる情報源を集積し整えていくこと、それらの告知を行うこと、そして当事者が利用しやすい形での情報の流通の仕組みを公的な形で整備することが求められる。

4-2 援助を受けての利用における課題

3-2-2に見られるように、PCが間接的な利用になっていた対象者から「直接利用したい」という意欲が語られたものの、文字入力の高難しさゆえに結果的に家族や支援者に援助を頼む形となっていた。間接的な利用の理由として共通して語られたのは「文字入力の高難しさ」であった。また、携帯電話の利用においても同様に、支援者の援助を受ける点は情報の整理や情報提供、及び文字入力に関する部分であった。例えばPCの入力方法を変更するなど、文字入力を簡易化する方法があればこれらは解決されるが、本調査の対象者らはいずれもそうした知識や技能を周囲の人々から伝達してもらえない状況にはなかった。すなわち、PCを使うための技能習得の機会や、文字入力を簡易にする方法を習得する環境にないことが、彼らの直接的な利用を阻害する要因となっているといえる。

平成10年度の『障害者白書』で障害者のデジタル・デバインドや情報バリアフリーが着目されて以降、主に視・聴覚障害者を中心に情報保障に関する施策やPCボランティアの養成などが行われているが、関連団体の自発的な講座等はあるものの知的障害者への具体的な対策や支援はなされていない。情報機器を直接利用したい意欲はあっても利用機会に結び付いていない層に対する、情報機器の運用能力やITリテラシーの獲得のための生涯学習の機会の保

障、あるいは個別具体的な支援の充実のための制度策定への提言が今後の課題である。

さらに本調査では、先行研究と同様に携帯電話からインターネットを利用する際のトラブルの事例がみられた²⁵⁾。本調査では情報機器を利用する際の「不安」や「わからなさ」が当事者の実感として強いことから、トラブル回避のための方法の伝達だけでなく、どう利用すると何が可能になるのかを伝えるなど、情報機器を利用する際の支援のあり方を使用に際した具体的な形で検討する必要がある。

4-3 利用のない状況における課題

PCの全く利用のなかった対象者たちは、二つの群に分類することができる。まず、PCを日常的に利用できる環境がなかった群である。特に、独居またはグループホームで暮らす5名のうち4名はPCを所持しておらず、それらの理由として金銭面や金銭が絡む意見が語られていた。またこれは携帯電話についても同様であり、携帯電話の現在の利用がない3名全員が金銭的要因をあげていることから、現在の利用機会は経済状態及びそれを左右する生活形態に影響を受けているといえる。これについては厚生労働省の日常生活用具給付等事業の情報・意思疎通支援用具のように、必要に応じて知的障害者にも購入支援を行うことが検討課題としてあげられよう。

一方で、PCについて「家にあるが使わせてもらえない」など、自ら直接やってみたい意志を持っているが家族や支援者側から利用を限定されていた群がある。利用に至っていなかった理由として家族や支援者からの「禁止」があげられていることから、知的障害者がPCを利用することに対する周囲からの支援のなさ、あるいは家族からの否定的な意識の存在が当事者による直接的な利用の機会を奪っていることが示唆される。これからの情報化社会における知的障害者への情報アクセスの機会の平等を考える上では、理解や利用が可能かどうかだけで阻むのではない、家族や支援者の情報支援に関する意識啓発、及び知的障害者の情報機器の利用に関する社会的な啓発が必要である。

5 今後の課題

調査時は対象者の中にはスマートフォンやタブレットPCの利用者はいなかったが、現在では特別支援学校における教材としての導入も積極的に試みられており²⁶⁾、数年でさらに状況が大きく変化していくことが予想される。本調査で得られた示唆に基づき、情報機器の発展に即した課題の析出と施策への提言を今後の課題としたい。さらに、ウェブ上でのソーシャルネットワークによる交流や情報入手が社会参加の一方策となりつつあることを考慮すれば、デジタル・デバイドが知的障害者の情報の受発信のみならず、社会参加自体を阻む可能性もある。情報機器の運用に関する教育的なアプローチの検討のみでなく、ウェブ上での社会参加や情報提供のあり方についても当事者の実感に基づく検討が必要である。

障害者の情報保障において、情報が自らに適した形として提示されることは、その場への参加と時に同義である。知的障害者が社会における情報・通信、及びコミュニケーションか

ら排除されることのないよう、知的障害者が「利用しやすい」ことに着目した情報機器の活用方法の検討と公的な知的障害者向けの情報支援の展開、当事者・家族・支援者への意識啓発が必要である。

謝辞

調査対象者をご紹介いただいた(福)全日本手をつなぐ育成会、各地の育成会、及び調査対象者に深く御礼申し上げます。なお調査時に平成21～22年度日本学術振興会科学研究費補助金(研究活動スタート支援)「知的障害者の情報アクセシビリティ向上のための基礎的研究」の、執筆時に平成24～26年度日本学術振興会学術研究助成基金(基盤研究(c))「スキャンディナヴィアにおける人権擁護システムとしての情報保障制度の実証研究」の助成を受けた。記して謝する。

註

- 1) 総理府編『障害者白書 平成10年版 「情報バリアフリー」社会の構築に向けて』、大蔵省印刷局、1998.
- 2) 打浪(古賀) 文子「知的障害者への情報のユニバーサルデザイン化に向けた諸課題の整理」『社会言語学 別冊』1、2010、p.5-19.
- 3) あべ やすし「言語という障害——知的障害者を排除するもの」『社会言語学』9、2009、p.232-251.
- 4) 中邑賢龍「知的障害とその周辺障害のある人たちへの支援技術開発の方向性」『ヒューマンインターフェース学会誌』7(3)、2005、p.213-218.
- 5) 総務省「障がいのある方々のインターネット等の利用に関する調査研究」、2012。
(<http://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2012/disabilities2012.pdf> 最終アクセス2014年10月15日)
- 6) 総務省「障がいのある方々のインターネット等の利用に関する調査報告書——国民全般の情報環境との比較を通じて」、2003。
(<http://www.soumu.go.jp/iicp/seika/data/research/survey/telecom/2003/0306-all.pdf> 最終アクセス2014年10月15日)
- 7) 文部科学省『教育の情報化に関する手引』、2009。
(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm 最終アクセス2014年10月15日)
- 8) 渡辺明広「知的障害高等特別支援学校(特別支援学校高等部)における『流通・サービス』の実施状況についての調査研究」『特殊教育学研究』47(1)、2009、p.23-35.
- 9) 清水潤・内海淳・鈴木顕「知的障害者の『新たな職域』開拓の背景と動向」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』27、2005、p.45-54.
- 10) 総務省 前掲5)
- 11) 江田裕介・松下香好「特別支援学校(知的障害・肢体不自由)の児童生徒における携帯電話の利用状況に関する実態調査」『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』17、2007、

p.59-64.

- 12) 江田裕介・森千代喜・一ツ田啓之「特別支援学校(知的障害)の児童生徒におけるコンピュータ及び携帯電話の利用状況」『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』20、2010、p.7-14.
- 13) 河村 宏「これからの情報サービスにおけるアクセシビリティ」『情報の科学と技術』54 (8)、2004、p422.
- 14) 対象者を軽度及び中度の知的障害者としたのは、彼らが日常生活において健常者と同じメディアや情報媒体、及びそれらを用いた情報・コミュニケーションの下にあり、健常者社会に同化せざるを得ない抑圧的な状況と困難を明確にできると考えられたからである。重度・最重度の知的障害者については、意思決定の問題との関連を論じつつ今後別稿にて言及したい。
- 15) 本調査は、筆者の調査当時の所属研究機関の倫理審査で承認を得た。研究目的の説明に際して、対象者に誘導的な同意をとることがないよう、研究説明書・同意書・調査内容・質問事項等への工夫を行った。具体的には平易で短い表現・ルビ・行間・文章の切れ目に沿って改行したものを、A4用紙にゴシック体12~14ポイントを使用し視覚的に提示した。また、調査における対象者の障害特性や話しやすさを考慮して、場所や時間の設定を対象者の希望に沿い、なおかつ事前に調査者と面識を得てから1対1で実施した。やむをえず初対面となり対象者が希望する場合は、質問に全て対象者が答えることを前提に、支援者・家族が同席した。調査結果は面接調査の年度内に対象者にわかりやすい平易な文章にして、対象者・家族・支援者に送付して確認を得た。
- 16) (福) 全日本手をつなぐ育成会とは、全国最大規模の知的障害児・者関連団体であった。1952年、母体となる「精神薄弱児育成会(手をつなぐ親の会)」が設立され、1995年より(福)全日本手をつなぐ育成会となった。平成26年6月に解散届を提出し、現在は後続の任意団体が設立されている。
- 17) 「本人活動」は「本人による、本人のためのグループ活動」であり、決定権の所在は当事者であり、それ以外の人々は支援者としてかかわる。自らが主体者として活動し感情を共有する場であり、自分たちの生活の権利を主張し、仲間とともに人生設計を行う場でもあるゆえに「セルフ・ヘルプ」機能、「セルフ・アドボカシー」機能を備えた場であるとされる。(参考:保積功一「知的障害者の本人活動の歴史的発展と機能について」『吉備国際大学社会福祉学部研究紀要』12、2007、p.11-22.)
- 18) 対象者が余暇時に外出する際は、外出の経路自体は移動とみなし「日常生活」に分類し、外出先で過ごす時間について情報媒体との接点を「余暇」の区分とした。
- 19) 本調査を実施した際、文字情報との接点及び困難についても同時に聞き取りを行い、その部分の調査結果については別稿にて論じた(参考:打浪文子「知的障害者の社会生活における文字情報との接点と課題——軽度及び中度の当事者への聞き取り調査から——」『社会言語学』14、2014、p.103-120)。なお、本論で述べる内容と上述の論文に重なる部分は調査対象者のプロフィール部分のみであり、内容は上記論文とは重ならない未使用部分であることを申し添える。内容に重複はないが、「情報機器」と「文字情報」の双方に接点がある箇所は別稿に注を付けて言及した。
- 20) 佐藤郁哉『質的データ分析法——原理・方法・実践』新曜社、2008.
- 21) 調査は紹介を得た17名に対して行ったが、調査時には中度であると自己申告したが後に重度に

該当することが判明した1名については調査結果より除外した。

- 22) 知的障害者であることを公的機関が認定したことを証明する手帳を「療育手帳」という。東京都は「愛の手帳」など、地方自治体によって呼称及び障害認定区分が異なることがあるが、面接時に区分を確認し療育手帳の等級で中度・軽度に相当する者を対象とした。
- 23) Eさんは聴覚障害6級との重複があったが、療育手帳を所持していること、日常生活では補聴器を利用し口話のみを用いていること、また文字情報との接点や摩擦が通常の知的障害者より多いと予想されたこと、の3点の理由から、情報の受発信の困難を分析・検討するうえで重要な対象者であると考え、本調査の結果に含めた。また、Oさんは障害者手帳を所持していなかったが、軽度の知的障害があると診断された経歴を持つことから、本調査では軽度と分類した。
- 24) 総務省 前掲5)
- 25) 水内豊和・武蔵博文「知的障害者の情報機器の活用実態調査」『富山大学人間発達科学部紀要』4（2）、2010、p.75-80.
- 26) 中邑賢龍「特別支援教育へのタブレットPC導入のポイント」『ATACカンファレンス2012東京』、2012、p.64-65.

表1 対象者の属性（年齢・性別・障害等級・生活形態・就労状況）

対象者	年齢 (調査時)	性別	障害区分	生活形態	就労状況
A	23	男	軽度	家族（親・きょうだい）と同居	特例子会社
B	26	男	中度	家族（親）と同居	一般就労
C	26	男	中度	家族（きょうだい）と同居	一般就労
D	32	女	中度	家族（親・きょうだい）と同居	一般就労
E	34	女	軽度	独居	一般就労
F	36	女	中度	家族（親・きょうだい）と同居	一般就労
G	37	女	軽度	家族（親）と同居	一般就労
H	38	女	軽度	独居	なし/アルバイト
I	38	男	中度	家族（両親・きょうだい）と同居	特例子会社
J	40	女	軽度	家族（親・きょうだい）と同居	特例子会社
K	42	男	中度	家族（親・きょうだい）と同居	特例子会社
L	42	男	中度	家族（親）と同居	一般就労
M	51	女	軽度	独居	特例子会社
N	51	男	軽度	グループホーム	授産施設・作業所
O	62	男	軽度	独居	一般就労
P	63	男	軽度	家族（きょうだい）と同居	授産施設・作業所

表2 対象者のPC・携帯電話の利用状況とその内容

対象者	PC 利用状況	PCの利用の内容	携帯電話 利用状況	携帯電話の利用の内容
A	○	中学から利用。毎日利用。インターネット（動画閲覧、ニュース、検索）が主。調べ物やレポートで活用。PC教室に2年間通った。	○	高校生から所持。電話、メール、インターネット、スケジュール、メモ、電卓、辞書機能などを幅広く利用。
B	○	中学から利用。毎日利用していたが機器が壊れていた時に携帯電話が主になった。インターネット（動画閲覧）が主。	○	中学生から所持。PCよりも使う。電話、インターネット（動画閲覧、ゲーム）利用が主。
C	○	月に1、2回利用。中学・高校・職能訓練で利用していた。インターネット検索（サークルHPから予定確認）などが主。ワードやエクセルも利用。	◎	中学生から所持。メールが主。電話、インターネット（ゲーム、ニュース、天気予報、電卓、QRコードも利用。ほぼPCの代わりとしても利用。
D	●	家族と共用で自分では使用しないが、月に2、3回、兄に文書作成や外出時の経路確認を依頼し、それをメールで携帯に送ってもらう。	◎	約10年前から所持。電話・メールが主。メールは絵文字や矢印を多用する。インターネットは家族を介して利用。電卓やスケジュールも使用。
E	◎	毎日利用する。職場での利用をきっかけに購入。主にインターネット（芸能人の情報・ブログの閲覧、旅行の予約）など。新しい機器に興味あり。	○	約15年前から所持。電話・メールが主。インターネット（路線検索、ゲーム）、QRコードなど利用。2台持ちの時期もある。
F	▲	自宅に所持なし。障害者のためのPC教室を受講したことがある。使ってみたいが、PCの値段が高く、見合うだけ使えるかわからない。	○	数年前から所持。わからない時は姉に相談する。電話が主、スケジュール、メモを利用。迷惑メールや知らない人から電話があると不安。
G	○	週に2、3回程度利用。文書作成や趣味（料理や製菓のレシピ検索）、年賀状作成に活用。PC教室に通った。新しい機器に興味あり。	○	10年以上前から所持。メールが主。QRコードはたまに使う。知らない場所に行く時、ルートを細かく説明してくれる機能がほしい。
H	▲	高校時以来使用なし。ほしいと思うが、置き場もなく、ウィルスや迷惑メールが心配なので所持していない。	○	10年以上前から所持。メールが主。メールアドレスの入力を支援者に頼む。アルバイトで頼まれた文章をメールで書く。スケジュール機能を多用。
I	▲	家族が所持しているが、使わせてもらえない。就労訓練やPC講習を受けたが、PCで何が出来るかわからない。	◎	5～6年前から所持。電話より友人とのメールの利用が多い。メールアドレスなどは文字に書きださないとわからない。
J	●	書類作成のために月に1、2回利用する際は家族の援助を受ける。インターネット・メールはほとんどしない。	▲	数年前所持していたが、半年くらいで料金が高くてやめてしまった。公衆電話も減ってきたので、また持ちたい。
K	○	毎日利用する。支援者に習い、PC教室にも通った。自宅に2台所持。メール、インターネット（趣味の情報収集、ブログ更新、旅行の予約）、写真のデータ化など。新しい機器に興味あり。	○	約10年前から所持。電話・メール。インターネットは時刻検索など。スケジュール、メモ、電卓、QRコード、TV（ワンセグ）など、使える機能は幅広く利用。
L	×	全く経験なし。以前は欲しかったが、どれを買ったらいいかわからないうちに、自分では触らなくてもいいという気持ちになった。	○	約12年前から所持。電話が主。インターネットでニュースや天気を見る。メールアドレスは書かないとわからないのでメールはほとんど使わない。

M	▲	所持なし。施設で生活していたときにワープロを使用。PCを利用して日記を書いてみたい。	◎	7、8年前から所持。電話・メールが主。緊急時の連絡に手放せない。以前携帯からのインターネットサイト利用料金の関係でトラブルがあった。
N	▲	所持なし。日常生活では利用しないが、作業所で触ったことはある。	▲	数年前は所持していたが、お金がかかるのとわずらわしいので使いたくない。以前番号を教えてたくさん電話がかかってきたことがあった。
O	×	全く経験なし。インターネットやメールの必要性を感じていない。利用しようと思わない。	▲	2、3年前まで所持していたが、金額が高いのと、ネットトラブルがあり持つのをやめた。持っていた時に便利さも感じず、面倒だった。
P	▲	家族が所持しているが使用させてもらえない。作業所で支援者に手伝ってもらいインターネットを利用。	○	5、6年前から所持。電話が主。スケジュールやメモ機能を使って、文字をメモ代わりに打ち込んで持ち歩く。

<利用状況の区分>

- ◎ : 就労時・日常生活の双方で直接自分で利用
 ○ : 日常生活で直接的に利用
 ● : 日常生活で援助を受けて利用
 ▲ : 過去に利用経験があるが現在は利用なし
 × : 全く利用なし

表3 PC及び携帯電話の利用状況の分類

情報機器	直接的な利用	援助を受けての利用	現在の利用なし
PC	(1) 就労時の使用からの利用 (2) 学校での技能習得からの利用 (3) PC教室の受講からの利用	(1) 家族の援助を受けての利用 (2) 支援者の援助を受けての利用	(1) 過去に利用経験はあるが現在は利用なし (2) ワープロの利用経験はあるがPCの利用経験なし (3) 全く利用経験なし
携帯電話	(1) 通話に関する利用 (2) 文字によるコミュニケーションに関する利用 (3) インターネット及びPCの代替利用 (4) 手書き・メモの代替利用 (5) 固有機能の利用	(1) 家族の援助を受けての利用 (2) 支援者の援助を受けての利用	(1) 通話料の問題による利用中断 (2) 利用の煩わしさからの利用中断